『キリスト教を語るなら…』ヨハネ14:4-6

14:4 わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」。
14:5 トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。
14:6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。

●序論
「聖書は、人生を導く地図、そして道しるべだ」と言われることがあります。
そして牧師は、羊飼いにたとえらえることがある。時々問うのです、ちゃんと道が見えているだろうか？…だから、こと聖書にはこだわるのです。
　そうして、ただイエスさまを指し示し、この方こそわたしたちの道なのだと示します。
これこそキリスト教と呼ばれるものです。
　それは道について、いくらか語ることではなく、その道を歩むこと。イエスさまに”ついて”語ることではなく、イエスさまご自身とともに歩むことです。

●本論
Ⅰ．道が必要です
あらためて、自分の人生で生きるべき「道」を知っている人は幸いです。
　それは、何かになりたい夢を持っているということ？　それとも自分の将来が見えているということ？でしょうか。　必ずしもそうではありません。

先週、イギリスのエリザベス前女王の葬儀のことを思い出してお話ししました。
　　エリザベス女王自身も完全無欠な存在ではなく、さまざまな失敗もあったでしょうし、誤解や非難をも受けてきたいた人であったと思います。
そんな中で、彼女がひとりの信仰者として神の赦しの福音の中に生きてきた人であったことは、彼女のスピーチでうかがい知ることができます。
　　良い時も悪い時も自分を導いてくれるのは、自分自身が信仰にどれだけ依存しているかを知っています。それゆえ毎日が新しい始まりです。
　　自分の人生を生きる唯一の方法は、正しいことをしようとすること、長い目で見ること、その日がもたらすすべてのことに最善を尽くすこと、そして神に信頼を寄せることです。
　　信仰によってインスピレーションを得ている他の人たちと同じように、私もまたキリスト教の福音にある希望のメッセージから力を得ています。

改めて、聖書に目を向けます。そこにはイエスさまと弟子たちとの問答が続いています。
　　14:4 わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」。
　　14:5 トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたし

たちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。
あのトマスはいつも正直な応答をします。
どこに自分の道を見出せるのか？　どこに答えがあるのか？…と。
それに対する答えが、続きます。
14:6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。
イエスさまは、どこかにある道について教えてくださるのではなく、ご自分を指して、「わたしが道である」とお答えになりました。
はっきり言えること。方向音痴のわたしでもこの道ならば大丈夫だということです。
イエスさまが道であるならば、イエスさまが共にいてくださいます。たとえ自分にはその先が見えないように思えても…、イエスさまが道でありこの方は、わたしたちを確実に父なる神のもとへ、その祝福へと導いてくださるからです。
だから大切な告白は、「イエスさま、今日も共に歩みます。わたしを導き一緒に歩んでいてください。」です。

Ⅱ．真理が必要です
自分の人生で「真理」を知っている人は幸いです。

わたしたちは、天地をつくられた神さまを知っています。
宇宙を見上げ、そして大自然を見渡して、どれも何かの偶然でできたものではない、偉大な知恵によってつくられていることに気づかされます。
そんな全宇宙の創り主なる神さまは、遠くにいてわたしたちをほったらかしにされるお方ではなく、わたしたち一人一人をよく知っていてくださり、わたしたち一人一人を、変わることなく心にかけていてくださることも、聖書が語る、神さまの不思議なのです。

ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。

そして遣わされたその御子イエスさまは、頼りない弟子、裏切ることも視野に入れながらも、その人生の回復をも心に留めて、その弟子が証言するのです。
13:1 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。
弟子たちは、この後イエスさまから離れ去ります。それでもイエスさまの愛と真実は変わらなかった。それがまさしく神さまのが示す「真理」です。
周囲の状況や、問題に左右されて変わることのない神の愛の真実こそ真理です。
辞書に「【真理】： いつどんなときにも変わることのない、正しい物事の筋道。真実の道理。」とある通りです。

先ほどのエリザベス女王の言葉を、一人の信仰の先輩者として思い返しています。
良い時も悪い時も自分を導いてくれるのは、自分自身が信仰にどれだけ依存しているかを知っています。それゆえ毎日が新しい始まりです。

自分の人生を生きる唯一の方法は、正しいことをしようとすること、長い目で見ること、その日がもたらすすべてのことに最善を尽くすこと、そして神に信頼を寄せることです。

真理は、絵に描いた餅ではなく、わたしたちに生きる力与えるほど確かなものです。ご自身を「真理」と証しするイエスさまに頼る時、わたしたちは、その愛の真実に頼って、最善を尽くすことができます。

そうして、昨日ともおとといとも違う、イエスさまとともに歩む「新しい一日」を経験できるのです。

今年の標語は、「御言葉を経験する」ということでした。どうか昨日とは違う新しい今日を、主とともに歩む者でありたいと願います。

Ⅲ．命が必要です

14:6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。

あらためて、自分の人生で「命」を知っている人は幸いです。

イエスさまは、ご自分を指して「命である」と言われました。

”命の事柄は、神さまの御手にある”。　これまで何度も申し上げてきたように、それがわたしが生まれたばかりの末娘を通して教えられた御言葉の経験でした。

1:21 そして言った、「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」。

さらに進んで、わたしたちはイエスさまを通して、さらにまさった永遠のいのちの祝福へと招かれています。

ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

イエスさまが約束なさったのは、この地上でどれだけ長生きすることができるか…ではありません。イエスさまは「永遠のいのち」を約束されているのです。

それは、神とイエス・キリストとの愛に満ちた充実した関係の中に生きる命をあらわしています。

イエスさまご自身が道です。この方とともに歩めるのです。　だから時にその先が見えなくても安心できます。イエスさまとともに歩むことができるからです。　さらには、そこに神さまの真実な愛の体験があり、また命の豊かさを知る経験へと至ります。

●さいごに

これは決して楽な人生を約束されたわけではなく、「豊かな人生」を約束してくださったのだと知ることは大切です。

一人の先輩の先生の病。それはわたしたちには寝耳に水のことでした。この先生は、その深刻な病の中で、ご家族に繰り返しこう言われているそうです。

「すべてが最善！」と。

この先生は、これからあれもしたいこれもしたい、そういう願いと、またビジョンを公言してきた先生です。
　その先生が、すべていのちの主なる神さの御手にゆだねて、この後どういう道をたどろうと「すべてが最善」と言葉に繰り返されるのです。
そこには、家族が経験している不安もあります。これからどうなるかはわかりません。

それでも「すべてが最善」と言い切れる。それは、これまでもそして今も、「道であり真理であり命であるイエスさま」を信じ、頼り、そしてともに生き抜いてこられている、一信仰者としての告白なのだとわかります。

　わたしはこのところ耳にする幾人ものそういう同労者の先生方の深刻な闘病を耳にする中で聞いた、この先生の言葉が心に響いています。
　「すべてが最善」と。
　　そして、わたしは思いめぐらしつつ、祈っています。イエスさまはこの時、この先生方とどのように共にいてくださるのだろうか…と。
あらためて、わたしたちは、「わたしは道であり、真理であり、命である」と言われた方について、ただ聞いているのではなく、この方を人生に迎えてこの方を信頼して歩みぬくものと召されています。
　そこに、まさに「すべてが最善」という信仰の経験をもいただくことができると信じるのです。